

活用方針・導入/活用までのステップ



VLP取組概要

■ VLP活用のねらい

- 適応支援グループ（適応指導教室）に参加している、あるいは教育相談室を利用している児童・生徒が、その時のコンディションや準備状態に応じて「足を運ぶことは難しいけれどオンラインであれば参加できる」という「バーチャル出席」を設けることで、相対的な適応支援グループ等の出席率を上げる。

■ 対象生徒・児童

- 教育相談室や適応支援グループを利用している児童・生徒

■ 運営時間

- 不定期（適応支援グループ実施時）

■ 活用方法

- 「みんなでプログラミング」を利用した学習
- 適応支援グループ実施中に、VLPを利用したレクリエーションを行う
- オンライン支援員とのコミュニケーション
- 適応支援グループを利用していない生徒と適応支援グループとのつながりを作る



VLPの導入/活用までのステップ

① PCの調達

適応支援グループ参加児童・生徒の持ち帰りGIGA端末あるいは、町内の小・中学校より借用したGIGA端末を利用

②動作確認等

動作確認及び操作方法等の確認

→インターネット環境や音声等の課題が判明

③活用方法の検討

上記の課題がある中でVLPを活用する方法を検討

④アカウント配布

適応支援グループに参加している、あるいは教育相談室を利用している児童・生徒及びスタッフにアカウントを配布

活動・取組み内容

活動・取組み内容

【導入前】

- 活用方法を検討する中で、地域独自の課題（インターネット環境が整わない、同室で複数台を使用する際にボイスチャットが使えない、音声の不具合等）が判明。日の出町ならではの運用について検討。

【導入初期】

- 教育相談室や適応支援グループの活動の中で、VLPの操作方法をスタッフと共に練習

【運用期】

当町ではインターネット環境や音声に課題があるため、スタッフがすぐにサポートできる状況かつ、ボイスチャットを使わない方法で運用

- 教育相談室や適応支援グループ来室時に「みんなでプログラミング」を利用したタイピングやプログラミングの学習
- 適応支援グループの生徒やスタッフがリアルで顔を合わせつつ、VLP内のテキストチャットやホワイトボード等を利用したコミュニケーション活動を行うことで、生徒同士やオンライン支援員とのコミュニケーションの機会を提供
- 適応支援グループでVLPを利用する際に、適応支援グループを利用していない生徒が別室よりVLPにログインすることで、生徒同士が交流する機会を提供
- 空間内に生徒が描いた絵を掲示

成果/好影響・次年度以降の方針・利用者の声

成果/好影響

- ✓ VLPを通してプログラミング等の学習を行うことで、他者とのコミュニケーションの機会が増加し、ソーシャルスキルのトレーニングになっている
- ✓ 適応支援グループを利用していない生徒が、適度な距離を保ちながらも適応支援グループの様子を知ることができた（間接的な集団体験）
- ✓ テキストチャットの使用や、アバターの操作により、対面ではないコミュニケーションの方法を体験することができた

次年度以降の方針

- ✓ 教育版のマイクラフトや桃太郎電鉄等の活用を検討（オンライン上で複数の児童・生徒が、同じゲームの世界を共有しながら集団体験をすることができないか）
- ✓ 適応支援グループを利用していない生徒がグループに興味を持つきっかけ作りの一つとして活用
- ✓ 当町のように同室でスタッフがサポートしながら、複数の児童・生徒がVLP上でのコミュニケーションを行う方法の模索

利用者の声



児童・生徒

- ・（みんなでプログラミングについて）レベルに合わせてガイドを外すなど、個人のレベルに合わせたタイピングの練習がしたい
- ・ 別室から適応支援グループに参加することで、適度な距離を保ちつつ、グループの雰囲気があったが、音声が無いとみんなが何をしているのか分かりにくい（近距離で複数台を操作しながら音声を使うことがR6は叶わなかった）
- ・ アバターを動かすのが楽しい



教職員や保護者等

- ・（みんなでプログラミングについて）分からない時のヒントがあれば、より使いやすい
- ・ 対面での会話とは異なるコミュニケーションの難しさがあるが、生徒、スタッフ共にオンライン上で他者との関わりを持つためのトレーニングになった
- ・ 課題が多い中で活用方法を考えることは難しかったが、多様な支援方法について考える機会となった
- ・ ホワイトボード使用時に、同じ画面上にテキストチャットを表示できるようにしてほしい